

接続助詞シについて

近 藤 研 至

On the conjunctive particle *Shi*

Kenji Kondo

The purpose of this paper is to describe the function of *shi*.

Shi is a Japanese conjunctive particle. It was pointed out that the morphemes *shi* attached to a predicate constitutes parallel clauses. But *shi-clauses* have a wider range of use. Therefore, its function cannot be explained from the point of view that *shi* constitutes parallel clauses.

This paper claims following points.

- (1) On Japanese complex sentence *P-shi Q*, *shi* is not used between P and Q. *Shi* attaches to P.
- (2) *Shi-clauses* have 5 types of use. But *shi-clauses* don't have characteristic significance.
- (3) The function of *shi* is to characterize P as *clauses*.
- (4) The distribution of *shi-clauses* is caused by the function of *shi*.

はじめに

「概念 (= 語彙的意味)」はコミュニティにおいて共有されるものであり、統語規則がもしそうした「概念」にすべて依存していたとしたら、「日本語である」ということを支えることは、かなり困難なこととなる。「概念」の心許なさは変わらぬ「事実」であるが、そうした「概念」の心許なさに揺らぐことなく、このことばそのものが「日本語である」と

いうことを支えているのは、機能語の存在であると言えるだろう。助詞は、それに前接する要素を文中に機能させることを専らとする機能語の一つである。

接続助詞は助詞である。このあまりにも当たり前の物言いは、従来の接続助詞研究においては看過されがちであった視点である。接続助詞に前接する部分をPとし、その接続助詞を含む節に後続する部分をQとしたとき、PとQの「関係」を構築するのが接続助詞の役割であるという視座から記述されることが多かった¹。しかし、小論の立場は、こうしたものとは大きく異なる。つまり、小論では、接続助詞は助詞である限り、Pを文中において機能させる役目を負う機能語であると考え、Qの存在は接続助詞にとって副次的なものであると考える。

小論は、以上のような視座から、接続助詞シについての記述と説明を試みるものである。

1 従来の研究の整理

接続助詞シの記述は、PとQとの「関係」に着目したものがほとんどである。ただし、その整理の仕方と記述の重点の置き方によっていくつかのタイプに分かたれる。

一つめのタイプは、「シには二つの用法がある」とするものである。これをAタイプとしよう。

- (1) 通知票は書いたし、学級通信も書いた。
- (2) 通知票は書いたし、あとは正月を迎えるだけだ。

¹ もちろん、従属節の内部要素の緻密な記述をおこなった南（1974）の指摘のように、A類・B類・C類の接続助詞があり、それによってQに対する従属度のグラデーションがあることは否定しない。これは、Pの機能を決定するのが接続助詞であって、Pが、接続助詞によって、たとえば従属節として機能させられている、とする小論の態度と、矛盾するものではない。

Aタイプは、(1) でのP「通知票は書いた」とQ「学級通信も書いた」の「関係」は「並列的な関係」で、(2) でのP「通知票は書いた」とQ「あとは正月を迎えるだけだ」の「関係」は「非並列的な関係」であると扱い、シには「並列の用法」と「非並列の用法」とがあると記述するものである²。国立国語研究所（1951）や、森田（1989）、日本語記述文法会（2008）などがあるが、Aタイプが全体の中では一番多いと言える。

次のタイプは、「P₁シP₂シQ」という形態を取り扱ったものである³。

(3) 彼は音感もいいシ、リズム感もいいシ、歌もうまい。(た)

(4) 彼は音感もいいシ、リズム感もいいシ、この先絶対売れるよ。

益岡・田窪（1989）は、(3) のシはすべて「並列」とし、(4) では、P₁に後続するシを「並列」と、P₂に後続するシを「従属」と、二種類のシの混成を指摘する。特に、P₂に後続するシについては、「並列表現全体を主節に対して従属的に結びつける用法」としている。Aタイプと近似的だが、上の指摘を尊重すると⁴、(3) の文構造は[P₁シP₂シQ]で、(4) は[[P₁シP₂]シQ]であるという、文構造の違いを読み込んでいると思われるため、Bタイプとして、区別しておくことにする。

次のタイプは、(1) のような「並列」の場合のみを取り上げて、他の「並列関係」をあらわす形式とともに記述を試みるタイプである。これをCタイプと言おう。Cタイプには森山（1997）や中俣（2007）がある。

次のタイプは、(2) のような「非並列」の場合を取り上げ、その場合のQの役割を記述するものである。これをDタイプとしよう。Dタイプには寺村（1984）がある。寺村は、その場合のQを「統括命題」⁵と呼び、

² Aタイプには、「シの用法」として記述した上で、(1) のタイプに現れるシを「並列接続助詞」、(2) のタイプに現れるシを「従属接続助詞」とし、それぞれを「違う助詞」として記述するものもある。

³ シ節が、「P₁シP₂シQ」の形で現れることが多いことは、森田（1989）でも指摘されている。

⁴ 実際、益岡・田窪（1989）は以下に示すような構造の記述を行っているわけではない。あくまで、指摘を「尊重すると」ということである。

非常に示唆に富む記述を行っている。

以上のタイプは、用例の扱い方と記述における重点の置き方はそれぞれであるが、いずれも「PシQ」の場合、PとQの「関係」には「並列」と「非並列」とがあることを前提としているところは共通しているのである。

白川（2009）は以上のものと大きく違った視座から記述している。白川（2009）は、「言いさし文」⁶を記述したものであるが、「言いさし文」に先立って、「主節を伴った完全文」についての記述をおこなっている。白川（2009）が扱う「完全文」の用例はBタイプと同様、「P₁シP₂シQ」のものである。白川は（3）については、「シ節の文内容と主節の文内容とが並列されている」とし、これを「併存用法」と呼んでいる。また、（4）については、「シ節の文内容と主文の文内容とが並列されているわけではない」とした上で、「この構文における並列のあり方は、何らかの「統括命題」を共有する文内容をシ節の文内容として列挙する」とし、これを「列挙用法」と呼んでいる。ただし、（2）のようなPシが一つの場合については、「シ節の文内容と並列すべき類例がほかにもあることを言外に暗示して、主文はそれから引き出された「統括命題」を提示している」と説明し、「列挙用法」の一つとして扱っている。

白川（2009）の独自性は、従来「非並列」と取り扱われてきた用例さえも「並列」のタイプとして記述したことである。「併存用法」は、（3）のようなPシが複数個ある用例を扱いながらも、「シ節の文内容と主節の文内容とが並列されている」とされていることからわかるように、P

⁵ 「統括命題」は国立国語研究所（1951）で指摘され、寺村（1984）はそれを「並列」の説明にかなり有効に用いたものである。

⁶ 白川（2009）では「言いさし文」は「言い切り」に対する意味で使用されており、主節を欠いた統語的に不完全なことを指している。ただし、それは「内容的には完全な文と同等の完結性をもった発話」であるとしている。つまり、現象としては「言いさし」だが、文としては「言い終わり」であるというのが、白川の主張しているところである。

とQの「関係」に「並列」を観察している。それに対して、「列挙用法」はPとQの「関係」にではなく、(文内にあるかないかは別にして)複数個のP同士の「関係」に「並列」を観察している。こうした視座に立てば、Bタイプと違って、(3)と(4)とを構造的な違いとして扱う必要はなくなる。

しかし白川は、Pを「併存」させたり、「列挙」させたりということをシの機能として指摘するのではなく、

接続助詞シの機能は、それによって「接続」された前後の文内容を関係づけるという構文的な機能というよりも、その節の文内容を、表現上の前後や有形無形を問わず、ほかの文内容と関係づける談話的な機能であると考えた方がよさそうである。

としている。これは「列挙用法」では「前後の文」関係においては「並列」を観察できないことから導出したことであり、実は白川はシを「並列」の助詞であると扱っている証拠であると言える。

2 「並列」とシの関係

1で従来の研究を概観してきたのであるが、従来、「PシQ」という構文は、「並列」という文脈の中で扱われてきたということがわかる。そして、その文脈の中で、シも記述されてきたと言えるだろう。しかし、果たして、シは本当に「並列」に貢献するのだろうか。

(5) 彼は音感もいいし、リズム感もいいし、アルバムも二枚出している。

(5)において、Q「アルバムを二枚出している」はP「彼は音感もいいし、リズム感もいいし」と、どのような「関係」にあるのであろうか。PとQは「並列」ともとれるし、「非並列」ともとれるだろう。(2)や

(4) の場合や、

(6) 成績はつけたし、あとは何をすればいいんだろう？

などQに疑問表現が現れる場合や、

(7) この催しで日本で二度目に『JLG / JLG』が上映されたりというのは本当に重要なことだと思うし、だから、このあとぜひゴダールの作品そのものを見ていただきたいと思います。(ゴ)

などQに「ダカラ」が明示されていたりなど、「非並列であること」が「わかりやすい」場合はいい。しかし(5)はそのような形式的な特徴もなく、PとQの「関係」について解釈に困るものである。

こうしたことから、PとQとの「関係」が「並列」であるとされるのは、聞き手の解釈に依存することであって、明示的なものではないということがわかる。形態的には何も変わらない二つの文において、「並列」であるかどうかを決定しているのは、その文構造や形態ではなく、PやQなどの「関係」に対する聞き手の解釈に依存しているということは、結局、接続助詞シについての従来の説明は肯定できないことになるだろう⁷。

「並列」であるというのは、PとQの解釈に依存しているが、そうした解釈を導出するにはいくつかの支えが考えられる。先に挙げた用例は、「内容に対しての知識」の支えによって導出されたものである⁸。それ以外にも、表現上の形式によって支えられる場合もある。

(8) ガラスの靴は確かに踊りづらいし、走りづらいです。(た)

(9) 実際、自転車漕ぐ女性の映像というのはトリュフォーも撮っ

⁷ Bタイプの、「P₁シP₂シQ」における構造の違いも、二つのシが明示的なものでない限り、肯定できないことになるだろう。

⁸ 中俣(2007)は、シを「類似性を元にした並列であるため、他に類似の事態があるという想定を聞き手がつことが多い」としている。しかし「類似性」はシの問題ではなく、「並列」という解釈を生じさせる原因の一つとした方がいいだろう。

ているし、いろんな映画にも出てくるわけです。(ゴ)

のように、PとQの主語が共通である場合、その二つの事態は、その主語にとって「並列」であると解釈されやすくなるだろう。またQにとりたて詞モが明示されている場合も同様である。

(10) 志村さんは「ガーン」っていう感じだし、私たちもブルーになりました。(む)

(10) は「並列」であるが、次の (11) の場合、

(11) 志村さんは「ガーン」っていう感じだし、そのため私たちもブルーになりました。

Qは「非並列」になる。以上のことより、表現上の形式から生じることは、あくまで「傾向」であって、先に述べたように、「並列」であるということは、シによって明示的に与えられている事柄ではないと言える。

3 シ文の記述

「PシQ」において、シは「並列」に直接的に貢献していないならば、一体、何を明示的に示しているのだろうか。こうしたことを記述するには、シの「言いさし文」を取り上げるのがいい。それは「Qがない」ということから、そのような環境でこそ、シの機能があからさまになると考えられるからである。なお、以下、シの「言いさし文」を「シ文」と言うことにする。白川(2009)で、シ文はかなり緻密に記述されているが、しかし、シ文の分布はさらに広い。シの機能を説明する前に、まずシ文の記述を行う。

3-1 いろいろなシ文

次のシ文は白川(2009)で「併存型」として扱われているものである。

但し白川は2で見たように、PとQ、あるいは複数個のPの「関係」から記述し、それに従って名前を付与しているために、それとは異なった視座を採る小論では、名前自体も異なったものを採ることにする。以下を「a型」とする。

- (12) ここにきてコスプレする子たちのプロポーションが格段によく
なってきましたね。顔ちっちゃいし脚長いし。(ア)

a型は、従来から記述される典型的な用例で、それに「並列」する何かを持つ。ここではシの機能を問題にせず、シ文の記述をするため、シ文のタイプとして「並列」ということを否定するものではない。a型は、(12)のような同一発話者による文を変えてのシ文の場合だけでなく、

- (13) 菊地「アンティバラスはあえて外したのには何か理由があるんですか？」D「どうしてでしょうかね。まずこちらの方が聴きやすいから聴いてしまうんですよ」菊地「こっちの方がシンプルな分、アフロ感も強いですしね」(聴)

のように、対話において現れることもある。ただし、こうした用例は、だれがPシを発話するののかという違いであって、シ文自体の分布の問題とは関係がない。

次の例は、白川において「列挙型」と呼ばれたもので、小論ではこれを「b型」とする。

- (14) 清水「ああ、でも、あの世界、おもしろそうですね」三谷「絶対おもしろいですよ。ほく、映画も好きだし、外国映画大好きだし」(む)

b型も、a型同様、

- (15) 「どうして彼とつき合わないの?」「だって好きじゃないし」⁹
というように、対話において発話される場合もある。

以上は、白川(2009)においても記述されたシ文であるが、シ文は、

それに留まらず、以下のような用例を数多く見ることができる。

(16) 「きみたち高校生は、勉強することが本務であり……」 「中学生
だし」

(17) (雨が降っていると思い、雨具を準備して玄関を開けたとき)
「雨止んでるし」

(18) 行けし。

(19) だれが行くし。

(16) を「c型」、(17) を「d型」、(18) を「e型」、(19) を「f型」としよう。これらは、その使用例から「最近の用法」として、限定的に扱われるかもしれない。しかし、こういう用例が生じるには、それなりの理由があるはずであり、シについての説明は、このような用例にも対応していなくてはならない。

3-2 c型について

(16) はたとえば先生が生徒に向かって言っている最中に発話されたものである。c型には、それと同じような用例として、

(20) 清水「あなたたちの関係が今どうなっているか知らないけど、
すごく愛し合った二人が距離を置いているという感じがしまし
たね」三谷「全然。愛し合ってもいないし、距離は昔からあっ
たし」(む)

というように、相手の発話が終了してから言われるものもある。これら二つの用例に共通しているのは、先行する発話内容に、シ文の発話者に

9 矢澤 (2005) は、「へんな日本語」を取り上げるという一般書の一部であるが、「理由」を表すシ文について説明している。矢澤は (15) のような用例について、「余情」や「相手への配慮」を表しているとしている。しかし、この例は一体誰に対して「配慮」の必要があるのだろうか。このように扱わざるを得ないのは、シは「並列」であるということの基本としているためであろう。なお、(15) に近い例として「わけわかんないし」を取り扱っているものの、それがどのようなシなのかについては具体的に言及されていない。

とって「間違った（と思える）」箇所があるときに発話されるということである。それは次の用例と比較してみるとよくわかる。シ文の発話者がそれぞれに先行する発話に「同意」している場合、

(16) '「きみたち高校生は、勉強することが本務であり……」「高校生だし」

(20) '清水「あなたたちの関係が今どうなっているか知らないけど、すごく愛し合った二人が距離を置いているという感じがしましたね」三谷「愛し合っていたし、最近距離をおいてるし」

のように後続できない。

こうした用例は、次のような用例とも連続的である。

(21) 「ちゃんと顔洗ってないからそんなにニキビが広がるんだよ！」
「そんなことないし」

(22) 「ちゃんと顔洗ってないからそんなにニキビが広がるんだよ！」
「うざいし」

(16) と (20) が先行する発話の「間違った箇所」を指摘する場合であったが、(21) と (22) は先行する発話全体に対してコメントしていると言える。ただし、そのコメントは、

(21) '「ちゃんと顔洗ってないからそんなにニキビが広がるんだよ！」
「そうだし」

(22) '「ちゃんと顔洗ってないからそんなにニキビが広がるんだよ！」
「ありがたいし」

という肯定的な反応を含む場合は許可されない¹⁰。

¹⁰ ただし、「どうせ、そうだし」など副詞ドウセを伴う場合は許可される。

3-3 d型について

以下の用例はd型と言えるだろう。

(23) (ちょっと遅れそう…やべー…みんなにまた叱られる)「っていうか、まだ、だれもないし」

d型は、発話者にとって、ある事態の成立を予想していたのだが、それと異なった事態に遭遇したときの発話に見られる傾向がある。d型も、c型と同様、

(17)' (雨が降っていると思い、雨具を準備して玄関を開けたとき)「し」

(23)' (ちょっと遅れそう…やべー…みんなにまた叱られる)「っていうか、みんな、もういるし」

というように、予想していた想定どおりに事態が成立している場合にはシ文はとられない。あくまで発話時以前に有していた想定と、発話時における事態の認知との間に、不一致があったときに限定されたものである。

なお、白川の言うようにシが「ほかの文内容と関係づける談話的な機能」を有しているなら、(17)'・(23)'が成立しない理由が説明できないことになってしまう。すなわち、これらの用例においても、「雨降ってるし」などはそれに先行する発話と「関係づける」という点においては何も障害はないからである。白川の説明は、成立している現象については説明できても、成立しない理由を説明できないものだと言える。

d型は想定との間に不一致がある場合に発話されるという性質はc型にも共通する。c型における「間違った」という認識は、先行する発話と自らの想定との不一致を根拠とするからである。ただしそれはあくまでシ文の発話動機の問題であり、シの機能の問題ではない。

4 シの機能とシ節の機能

4-1 シの機能

ここまでシ文をあたかも「文」であるかのように扱ってきたが、現象だけを捉えるなら、そこには「シ節で終止している」ということがあ
るだけである。シに前接するPには、動詞、イ形容詞の非過去形・過去
形、ナ形容詞の語幹、名詞+「だ／だった／である／であった」が現れ、
さらに、丁寧形や主題や認識のモダリティ形式も現れ、その接続形式は、
いずれの場合でも「終止形」である¹¹。こうした現象から鑑みるに、シ
に前接するPは、きわめて「文」に近いということが言えるだろう。シ
文の形で発話されることが多いことと、Pに現れる要素の問題から、シ
文はシの「終助詞的用法」と呼ばれることも多い。しかし小論では、あ
くまでシ文は「文」ではなく「節」とであると扱うために、シを「終助
詞」とは考えない。

仁田(1995)はシテ形接続の意味・用法が広汎で多岐にわたるのは、
「接続形式としてさほど明確な固有の意義を有していないことに基因し
ている」とする¹²。この性質は、シにも共通する。接続助詞として分類
される語はいろいろあるが、Pを、「理由」として、あるいは「逆接」
として機能させるなど、そのほとんどはPに固有の意味を付与するも
のである¹³。しかし、シは、シテ形同様、Pに対して固有の意味を付与
することなく、単にPを「節」として機能させるにとどまる。「節であ
る」ということは、「文ではない」ということと等価であり、すなわち
シは、Pが文としては未完結であるということを経験的に表す文法形式

¹¹ こうしたことは南(1974)で記述され、南はシをC類の接続助詞として記述している。

¹² 仁田は、シについては「並列」としている。そのため、シテよりも固有の意義を有してい
るとして扱っている。

¹³ 従来言われるように、それぞれの接続助詞が、なにかを「接続させる」という機能を有し
ているかどうかについては、小論では、再考が必要であろうと考える。

であると言える。この点から、小論では、シを、文であるということを積極的に認める終助詞とは考えないのである。また、小論の視座は、白川の「言いさし文」の定義である「内容的には完全な文と同等の完結性をもった文」ということとは、「内容的には」という点が気になるが一致しないことになる。すなわち、「節である」ということは、「文として完結していない」と考えるからである。以上をまとめよう。

(24) シの機能：シはPを節として機能させる。

シテや用言の連用形などは、それ自体「続く」ということをその形式として既に折り込んでいる。それに対してシは、オプショナルであるが故に、広い分布を産出する、生産性の高い形式と言えるだろう。

4-2 シ節の機能

(24) に従って、「完全文」とシ文の分布が説明可能になる。「完全文」の場合は、それが「並列」・「非並列」などのPとQの「関係」のあり方を解釈として生じさせるのは、単に「節」としてPを差し出しているだけだから、その環境において、さまざまな「意味」を導出することになる。「完全文」においては、発話者がPシと関係するQを差し出していることから、Pシを関係づかせるのは解釈者にとって非常に手続き的である。「節」として差し出されたPについて、Qが後続するのは、Pの問題ではなくQの問題であると考えられる。その点において、Qに着目した寺村（1984）は評価されるべきである。

シ文においても、Pは「節」である以上、「文が完結していない」と解釈される。このことから、Pシには、置かれた環境に従って談話的な機能が発動する。もし、Pシが何かに「接続」されるような環境がある場合、解釈者はPシを何かと「関係」づけるだろう。これによってa型とb型とが生じることになる。こうしたことは白川が「ほかの文内容と

関係づける談話的な機能」と指摘することと似る。ただし、白川の言う「関係づける」のは、シにとっては与り知らぬことで、解釈者によってなされることであると小論では考える。

もう一つは、もし関係づけられる何かが発話場になかった場合である。c型とd型は、どちらとも「非対話文である」という傾向をもつ。d型はもとより、c型は、状況としては対話の場面に現れているシ文であるが、シ文自体は聞き手を目指した「対話文」とは言えない。このことは、次のような用例を取り上げると、はっきりする。

(17)「雨が降っていると思い、雨具を準備して玄関を開けたとき

「雨やんできますし」

(22)「ちゃんと顔洗ってないからそんなにニキビが広がるんだよ！」

「そんなことないですし」

c型もd型も、Pには丁寧の形式が現れにくいのである。こうしたc型・d型の「非対話文である」という性質は、重要な性質であると考えられる。先にc型・d型は想定との不一致であるということをもつて動機づけとして発話されることを指摘したが、これは「非対話文である」ということと関係する。すなわち、だれかの発話（内容）や事前にある想定と一致するならば、一致したということをもつて「対話文」をもって差し出すことが好まれるだろうが、もし不一致であるならば、そして、不一致であることをただ言うためには、「非対話文」の方が適しているだろう。

ところでe型は、

(25) ボール投げろし。

というように命令表現にシが現れたものであり、f型は、

(26) どこがおもしろいし。

というように疑問表現にシが後接したものである。一見、実に奇妙な用例であるという印象を受けるが、「若者ことば」としてこうした用例は

かなり採集できる。特定の聞き手に対して命令行為や質問行為を行うのではなく、ただ単に「非対話文」として命令表現や疑問表現を発話することはそんなに珍しいことではない。

以上のように、関係づけられる何かが発話場になかった場合、シを用いての「Pは節である＝文が完結していない」ということが明示されることで、Pシには「非対話文である」という談話的な機能が発動されることになる。こうしたことから、積極的に「非対話文である」という談話的機能を発動したいとき、シ文を使用していると言えるだろう。シは、「非対話文である」という談話的機能を発動させるには、とても生産性の高い形式として、最近使用される傾向にあると言えるだろう。

以上シ節について説明をしたのであるが、白川が「シの機能」として「ほかの文内容と関係づける談話的な機能である」としたのは、実はシ節の機能（の一部）であって、シは、(24)で提示したような統語的機能を有していると考えられるだろう。

おわりに

従来、接続助詞は、その「接続する」という機能ばかりが注目されてきたが、少なくともシについてはPをどのように機能させるのかということに注目しなければ、その分布の広がりに対応できないと言えよう。こうした視座は、他の接続助詞と呼ばれてきた形式全体にもあてはまるだろうが、それについては稿を改めなければならない。

引用文献

- 国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞一用法と実例一』秀英出版
- 白川博之（2009）『「言いさし文」の研究』くろしお出版
- 寺村秀夫（1984）「並列的接続とその統括命題—モ、シ、シカモの場合—」『日本語学』3-8 pp.67-74
- 中俣尚己（2007）「日本語並列節の体系—「ば」・「し」・「て」・連用形の場合—」『日本語文法』7-1 pp.20-35 日本語文法学会 くろしお出版
- 仁田義雄（1995）「シテ形接続をめぐって」『複文の研究（上）』仁田義雄編 pp.87-126 くろしお出版
- 日本語記述文法研究会（2008）『現代日本語文法6 複文』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則（1989）『基礎日本語文法』くろしお出版
- 南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店
- 森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店
- 矢澤真人（2005）「わけわかんないし。」『続弾！問題な日本語』pp163-168 北原保雄編 大修館書店

用例出典：下線部分が略称

- 『たてつく二人』三谷幸喜・清水ミチコ（幻冬社）／『むかつく二人』三谷幸喜・清水ミチコ（幻冬社）／『ゴダールの肖像』浅田彰・松浦寿輝（とっても便利出版部）／『聴き飽きない人々』菊地成孔（Gakken）／『アフロ・ディズニー2』菊地成孔・大谷能生（文藝春秋）